

2012年 春号

第77号

僧伽編集委員会

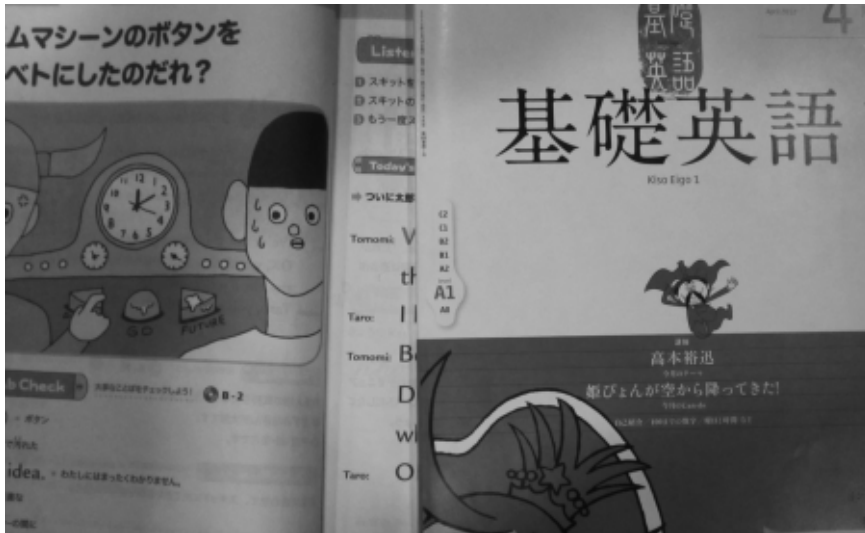
〒921-8031
金沢市野町2丁目32-4
徳法寺内
TEL (076) 241-5219
題字 本多 千翠

イ僧 イ伽

しかれば本願を信ぜんには、
他の善も要にあらず、念仏
にまさるべき善なきゆえに。

『歎異抄』第一条

『歎異抄』
唯円が亡くなられ
た親鸞聖人の言葉を
書き起こした書



現在の「基礎英語」のテキスト。月一冊出ているが、母の遺品の中にはこれが十年分あった。

ベサメ・ムーチョ

常徳寺 西山 彰

もう、懐メロといっているのか
も知れない。「ベサメ・ムーチョ」
という曲があった。

私が育った京都の実家では、こ
の歌のスペイン語の歌詞がトイ
レの壁に貼ってあった。

母は、五十歳も半ばを過ぎたこ
ろ、何を思ったのか、急に英語の
勉強に憑りつかれた。その勢いは
とどまるところを知らなかった。

「オフクロ凄いぞ！俺でも知ら
んような英単語を勉強しとる。」
最初にトイレで驚嘆の声を上
げたのは、大学で英語の教師をし
ている弟だった。

覚えなければならぬことは
トイレに貼るといのが当時の
西山家のしきたりで、それをもつ
とも忠実に守っていたのが母で
あった。

そしてベサメ・ムーチョである。
英語だけでは飽き足らず、第二外
国語にまで手を拡げていたの
か……私は驚きを通り越して
半ばあきれてしまった。

母が亡くなったとき、遺品の中
から、NHKラジオの基礎英語の
テキストやノートが大量に出て
きた。充実した日々だったのだ
ろう。

そして、まさかと思ったが、そ
の中にはスペイン語のテキスト
があった。

昨日まで知らなかったことを
今日知っている、夕べ判らなかつ
たことが今朝判る、そのことが単
純に嬉しい。だからもつともつと
勉強したくなる。母はよくそんな
ことを言っていた。

戦前の小学校しか出ていない
母だったが、「字び」の本質を知っ
ていたように思う。

ちなみにベサメ・ムーチョとは、
「キスして、いっぱい」という意
味だった。最近まで知らなかった
私は、不肖の息子であったことを
詫びたい気持ちになった。

今春長男が中学生になる。ラジ
オで基礎英語を毎朝聴くことにな
りそうだ。

浅田正文

(福島県田村市から
石川県金沢市へ避難)



原発難民となって早一年、今の気持ち

「さようなら原発・

生まれ変わろう日本」

三・一一原発大惨事により福島県田村市(旧緊急時避難準備区域)から石川県金沢市へ避難を余儀なくされてから、早くも一年になります。

金沢への避難のきっかけは三月十二日原発爆発直後の友人からの電話でした。「俺の所へ直ぐに来い、遠い方がよい、何をモタモタシテいる。」でも、地震で食器の殆どが割れ散乱した家の片付けや共同水道の配管修理など、目先のことに忙殺

されていたため「行きます」

と直ぐには返事をできませんでした。その後、夜になって行政無線が「避難指示」と放送。それでも数日で帰れるだろうと勝手に思い込んで毛布と水とビスケットを積み、夜の九時に金沢へ出発しました。翌日夕方金沢着。それからあつという間の一年。友人の電話がなければ今私たちはどうなっていたことか。ただただ感謝

現在仮住まいとはいえず、生活がそれなりに落ち着い

てくると共に哀しみが深くなることを抑えることができませぬ。福島へ帰りたくも帰れない。故郷を失いました。定年を前に東京から福島山奥に移り住み、田畑を耕し、山菜を摘み、山栗を拾い、山で伐採した木をストロブにくべ風呂も薪の自給自足の生活。福島で歩み出した第二の人生が三・一一に一瞬にして根こそぎ奪われてしまいました。

地震ではなく原発事故によつて。

田植えは手、稲刈りは鎌、天日に干し秋の高い青空のもとでの足踏み脱穀機の軽やかな音、散歩のついでに摘むタラの芽や露のとう、畑でかぶりつくトマトや胡瓜、薪ストーブの前でのうたた寝……。金はなくとも何と贅沢な生活だったのでしよう。原発事故が私たち夫婦の生活を奪い去ってしまいました。これから「想定外」の第三の人生を歩み出さなければなりません。哀しい。この現実を今年に

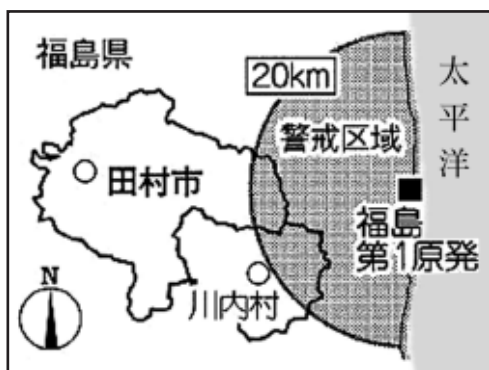
なつてようやく受け止めることができるようになりました。

郵送されてくる福島地方紙の投書欄には生の声が載っています。そして電話での福島友人との話や我が家へ一時帰宅した時などの話の中から浮かび上がってくることは「分断」です。母親が息子に「健康が心配なので避難しよう」というと息子は「俺より小さな子がここに住んでいる！」と反論し親子の分断。「安全キャンペーン」を信じる夫と妻の分断。自給用米の汚染の恐れから他県産米を購入した嫁と祖父との分断。安全キャンペーン派とインターネット派との間での分断。避難指示地域と自主避難者との支援の違い。避難者と留まった人との間の溝。かつて民族を分断に持ち込んだ植民地政策に今の福島県が重なってしまったてなりません。

原発事故は原子炉の破壊・国土の汚染ばかりでは

なく家庭も地域をも破壊しています。このような重苦しい思いは福島限りにしたい。対峙すべきは国であり電力会社のはずです。でも分断は哀しい現実なのです。

石川県の皆さん、北陸の皆さん、全国の皆さんに私たちのような経験をほしくはありません。福島原発事故をご自身のこととして受け止めていただけたらと願っています。子どもたちのためにも、虫や動物や魚や草や木などあらゆるもののためにも、原発にさようならし新しい日本に生まれ変わりたい。皆さんと共に！



真宗人物伝

第二十六回

徳法寺 杉谷 浄

信楽

今回は親鸞聖人の五番弟子である信楽です。もともとは相馬三郎義清という武士であったと言われています。関東の二十四人の高弟の五番目に数えられるほどの方ですから、才覚に秀でたものがあつたのでしょうか、親鸞聖人の教えに異議を唱え、一旦は弟子から外れたと言われています。具体的によのうな異議の内容であつたのかは定かではありませんが、信楽が親鸞聖人のもとを離れ故郷に帰つていつた際の話として『口伝鈔』に次のように伝えられています。

信楽が故郷に帰る時、蓮位という弟子が、親鸞聖人が信楽に与えていた本尊や署名の入つた多くの聖教を粗末に扱うかもしれないから取り上げた方がいいのではないか、と言いました。すると親鸞聖人は「本尊、聖教をとりかえずということとは、決してして行つてはならないことです。なぜなら、私の弟子と言える者など一人もいないからです。一体何を教えたならば、私の弟子だということができるでしょう。念仏申す者は、皆が如来の弟子ですから、同じ仏道を歩む者同士であり、どちらが上とか下とかはありません。念仏往生の信心は、釈迦如来と弥陀如来による方便のおかげで心の中に起こってくるもので

すから、私が誰かに信心を授けるといふことではまったくありません。

最近、互いの考えが違つて異なる道を歩み出した者に対して、本尊や聖教、与えた名前を取り返したり、中には与えた信心までも取り返すなどということが、国中で起こっているのとこのことです。このようなことはあつてはならないことです。本尊や聖教は、すべての衆生を救うための手だてなのです。私との結びつきを捨てて、他の仏教の門に入つていったとしても、本来仏教は私だけのものではないのですから何の問題もありません。如来の教えは広く世間に開かれたものだからです。

もし、親鸞という名前が書いてあるために、坊主憎ければ袈裟まで憎しの例えのように、その本尊や聖教まで憎く思い、山野に捨ててしまったとしても、たまにそれを拾つた者がその本尊や聖教によつて救われ

ることがあるのなら、それはそれで如来の本意にかなうものです。仏法を普通の財産のように思つて、取り返すということは、有つてはならないことなのです。」とおっしゃいました。

親鸞聖人の仏教に対する姿勢をうかがい知ることができます。

このような教えを引き出した人物としても、この信楽は真宗にとつて大切な方であると言えます。

この話を伝えている『口伝鈔』を書かれたのは、親鸞聖人の曾孫で、本願寺を建立した覚如上人です。この覚如上人が父である覚恵上人と共に関東に行かれたとき、この信楽と会い、悔い改めた信楽を再び親鸞聖人の門流として迎え入れたといひます。これは信楽が亡くなる一年前のことでした。この話がどこまで真実であるのかは定かではありませんが、やはり親鸞聖人の弟子である唯円が残した『歎異抄』にも「親鸞は弟子一人ももたず」ということが書かれていますから、これに近い出来事はあつたのだでしょう。この逸話から親



杉谷浄の

ラジオ案内

五月一日(火)

六月五日(火)

七月三日(火)

八月七日(火)

F M・N I(七十六

・三MHz)で午後一時

半から一時間放送しま

す。番組名は「生活一番

シャトル便 住職のよも

やま話」です。再放送は

放送日の週の土曜朝六

時からです。インター

ネットでも聞けます。

真宗豆知識

裳付

私達僧侶が着る衣にはいくつかの種類があります。

普段着として多く用いられているのが、黒くて両脇の裾に箒が付いた間衣や、私たちが着ている黒くて襟とベルトが付いた教衣です。これに対して、法事や葬儀などで着る茶色い色をして両脇の裾にフリルのついた衣が、色裳付といわれるものです。

この裳付の歴史は古く、平安時代の僧侶の普段着であつたようです。位も官職も持っていない僧侶が着ていたので空袍や空衣の名前も残っています。裳とは今でいうスカートのようなもので、これを上着に縫いつけて一体化したので裳付といえます。今のいい方ならワンピースというところでしょうか。親鸞聖人が着ていたのもこの裳付ではないかと思われま

京都の六波羅密寺にある空也聖人像もこの裳付を着ています。(図①)

念仏聖の祖といわれる空也聖人は、このように首か

ら下げられた鐘を叩きながら、念仏を称えて町中を歩いておられたようです。また、弁慶で知られる僧兵もこの裳付を着ていま

した。

た。図②の2と3が裳付になります。

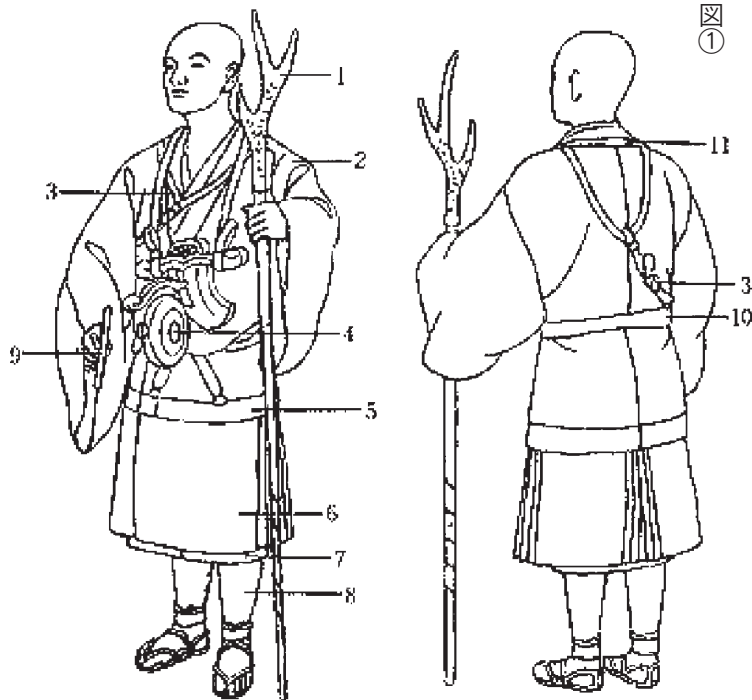
最近では男性でもスカート

を着るスカート男子と呼ばれる人がいるということ

すが、着物も巻きスカートのようなものですから、案外日本ではそれほど違和感のないものなかもしれま

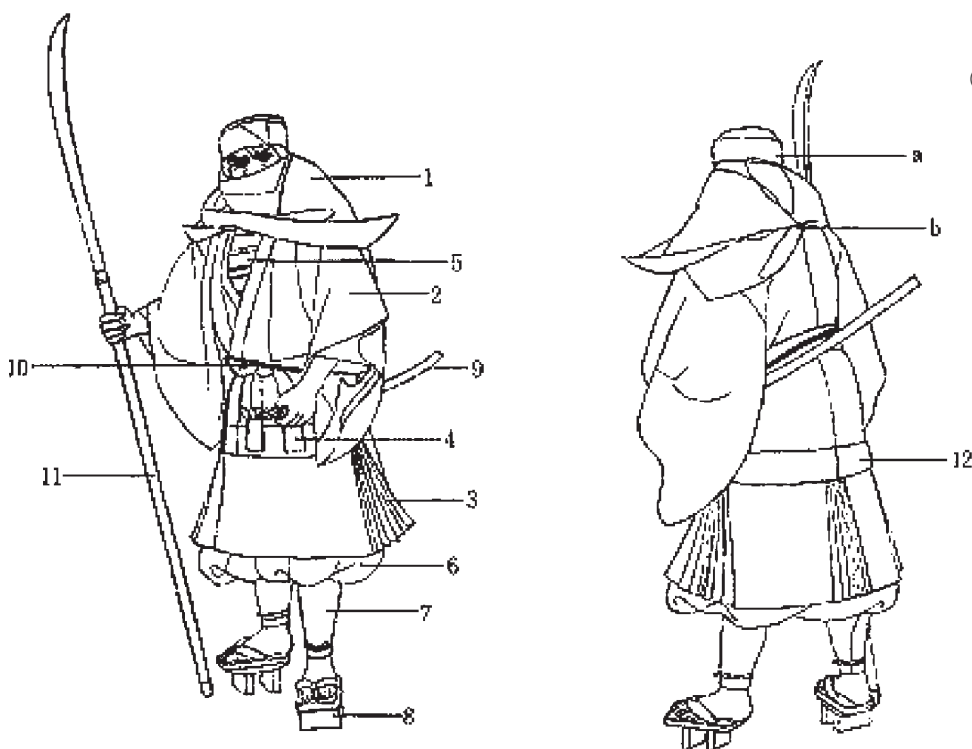
せん。(浄)

図①



- 1、鹿の角をつけた杖
- 2、裳付
- 3、袈裟
- 4、鉦
- 5、裳付の雨覆
- 6、裳付の裳
- 7、小袖
- 8、脛巾
- 9、撞木
- 10、石帯
- 11、鉦の吊り紐

図②



- 1、鹿の角をつけた杖
- 2、裳付
- 3、袈裟
- 4、鉦
- 5、裳付の雨覆
- 6、裳付の裳
- 7、小袖
- 8、脛巾
- 9、撞木
- 10、石帯
- 11、鉦の吊り紐
- 12、裳付の裳

本の紹介

科学の原理と人間の原理

金沢教務所発行
高木 仁三郎

科学が人を幸せにするかどうかという点については賛否両論がある。

私はどちらかというところ、科学擁護派である。その理由は、占いや迷信がはびこっていた前近代的な時代から人々を解放したもので、科学の光だったからである。

この原稿を書いているのは二月の末で、もうすぐ三月一日から一年がたとうとしている。いまだ東日本大震災の悪夢から覚めない中、私は『科学の原理と人間の原理』という一冊の本を手にとっていた。

原発問題の難しさは、その是非について我々素人に容易に判断できない点にある。そんな中、いまだに原発を再稼働させるべきか否かの議論が続いている。

その論点は、いつの間にか、そもそも科学や科学技術が信頼に足るものであるか否かという話となつていく。そうなるとうとう、ほとんどの場合、その判断は個人の思想信条にゆだねられることとなる。

それまでのどのような科学とも違っているのだと氏は主張している。この切り口は、専門家ならではの新鮮だった。氏の論旨を私なりに要約すれば以下のようになる。

かつて人間は、鳥を真似て飛行機を発明した。この例からもわかるように、科学技術というものは、基本的に自然を模倣しようとするものである。そういう意味では、核分裂によってエネルギーを得ることも、自然の模倣である。なぜなら太陽の膨大なエネルギーは、核分裂によるものであるからである。

では飛行機と原発の違いは何か。鳥は地球上で人間と共存しているが、放射能を放出し続けている太陽そのものには人間は近づけない。この点が決定的に違うのである。そもそも核と生命は共存できないものなのである。そういう意味では、地球は宇宙空間において生命をはぐくむことができた

極めて稀な天体なのである。もちろん飛行機の安全性が絶対的に保障されているわけではない。しかし核分裂を地球上で起こすということは、奇跡的に生命が発生した地球という天体に、太陽を持つてくると同じことなのである。危険性が、飛行機とはけた違いに大きいのである。

ここで述べられていることは、科学が善か悪かといった大雑把な議論ではない。「原子力だけは別物だ」というのは、現場の研究者の偽らざる実感なのだろう。もともと人間の手でコントロールできないものには、手を出すべきではないと氏は言いたいのだろう。これは十分に科学的で理性的な判断であると言つてよい。

この本がもっと早く出ていたらという思いは禁じ得ないが、今だからこそ氏の主張に真摯に耳を傾けるべきではないかと思うのである。

極めて稀な天体なのである。

もちろん飛行機の安全性が絶対的に保障されているわけではない。しかし核分裂を地球上で起こすということは、奇跡的に生命が発生した地球という天体に、太陽を持つてくると同じことなのである。危険性が、飛行機とはけた違いに大きいのである。

ここで述べられていることは、科学が善か悪かといった大雑把な議論ではない。「原子力だけは別物だ」というのは、現場の研究者の偽らざる実感なのだろう。もともと人間の手でコントロールできないものには、手を出すべきではないと氏は言いたいのだろう。これは十分に科学的で理性的な判断であると言つてよい。

この本がもっと早く出ていたらという思いは禁じ得ないが、今だからこそ氏の主張に真摯に耳を傾けるべきではないかと思うのである。

『心の相談室』

毎月第四土曜日

午後三時〜五時

東別院横

「いちよう館」二階

相談料無料

日常生活でのいろいろな悩み、家族のこと、友達のこと、学校のこと、仏事の疑問等を、僧侶がお聞きします。



和讃に学ぶ

第三十八回

常徳寺 西山 彰

煩惱にまなこさへられて

撰取の光明みざれども

大悲ものつきことなくて

つねにわが身をてらすなり

このままでもなんとなく意味が分かるのですが、念のため私のつたない現代語訳を添えておきます。

煩惱に眼がさえぎられて、如来の撰取不捨のお救いの光が見えない私たちではあります、仏様の慈悲の光はつねに私たちを照らしてくださいております。

この和讃は、七高僧の第六番目にあたられる源信僧都のお言葉を、聖人が和讃に

詠まれたものです。

源信僧都は主著『往生要集』の中で「我亦た彼の撰取のなかに在れども、煩惱眼を障へて、見たてまつるに能はずと雖ども、大悲倦きことなくして、常にわが身を照らしたまう」と書いておられます。これがそっくりそのまま正信偈に引用されているのです。

聖人は、このお言葉を非常に大切にしておられました。意味を知らなければ知ることが分かります。この一節こそが、私たち凡夫がお念仏でしか救われないことの根拠を示しているからです。

仏教に興味を持ち、本を読んで勉強しているという方は、ちまたに数多くいらっしゃいます。

しゃいます。しかし残念ながら、それらの方々には、先に自分の人生観なり宗教観のよなものがある、それを都合よく仏教で裏付けているにすぎない場合が多いです。

結局のところ、人は自分が見たいようにしか見ないし、聞きたいようにしか聞けないものです。大変教養のある方でも、いやそういう方こそ、その傾向が強いといえます。そのような態度で宗教を求めるならば、これほど危険なことはありません。

「私が信じる」とか、「私が信じない」とか申しますが、そう言っている「私」とは一体何なのでしょう。それを言い当てているのが、「煩惱にまなこさへられて」という言葉です。この言葉は、まさにわれわれ凡夫の判断そのものが、あてにならない自分勝手なものではないということをお教えてくれているのです。

そういう我々だからこそ、お念仏以外に仏様とつながっていくすべはないのです。

聖人は、源信僧都の言葉によつて、お念仏だけでいいのだという確信を深められたに違いありません。



徳法寺

金沢市野町

二丁目三二一四

TEL 二四一―五二一九

◎お講 (石坂同信会主催)

毎月二十一日

午後七時半より

講師 四月 細川 公英

五月 杉谷 浄

六月 西山 彰

七月 杉谷 浄

◎自由にご参加ください。

◎報恩講

五月二十七日(日)

午前九時半より 勤行

正信偈のお勤め

午後十時半より 法話

狐野秀存氏

(大谷専修学院院长)

正午より 御齋

手打ち蕎麦 更科藤井

午後一時より 演奏

裨島律子氏(ハープ)

午後二時より 講演

大井学氏(金沢大学教授)

各寺のご案内

◆常徳寺

金沢市寺町

五丁目一番二九号

TEL 二四一―二六四九

編集委員

西山 彰 (常徳寺)

杉谷 浄 (徳法寺)